

＜第132回 国際ARCセミナー(竹中悠美教授)レビュー＞

浮世としての家庭空間

― 勝川春章《婦女風俗十二ヶ月図》の構図をめぐる試論 ―

橋本 真佐子(沼津工業高等専門学校教養科 助教)

E-mail hashihime103@me.com

1. はじめに

本稿は、2024 年 5 月 8 日に立命館大学アート・リサーチセンター (ARC)、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS) 日本研究センター (JRC) / Centre for Translation Studies (CTS) による共催で行われた「第 132 回 国際 ARC セミナー」における竹中悠美氏(立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授)の講演について報告するものである。

講演内容は、女性、男性、子供、高齢者が視覚文化を受容・消費し、さらに創造する空間としての「家庭」という視座から竹中氏が 2022 年度より進めている共同プロジェクト「ARC データベースを活用した家庭内視覚文化研究」の一環として、江戸中期の浮世絵師、勝川春章の《婦女風俗十二ヶ月図》(以下、《婦女図》)に背景として描かれた家庭空間の特徴と特殊性を論じるものであった。

2. 講演内容

2-1. 勝川春章肉筆画の研究状況

春章は、明和初期期(1764-71)に役者の似顔絵版画で名をあげ、安永期(1772-80)に入ってから美人画・風俗画を描いた絵師で、多数の門人を率いて画力を誇った。竹中氏が春章に注目したのは、浮世絵の対象が遊里や歌舞伎などの理想化・虚構化された「公」空間の遊女や役者から、町娘や内儀といった一般人と彼女たちが暮らす「私」空間をも含むようになる変革に関与していることに、加えて《婦女図》は風俗画と肖像画の中間に位置する美人画というジャンルにおいて、肉筆画ならではの細密描写と優美さで「神品」と評価されていることにあるという。本作は、女性の風俗をモチーフにした月次絵の掛軸であり、12 図中 10 図が現存し、現在は MOA 美術館が所蔵している。

2000 年代から春章研究は急展開を見せ、(1)制作年や春章の生年などの年代考証にかかわるもの、(2)パトロンであった松浦静山や柳沢信鴻にかかわるもの、(3)裏彩色技法など制作手法にかかわるもの、(4)雅

俗論、の四点が中心となってきた。特に、2012 年の内藤正人氏による包括的研究¹⁾を皮切りにした春章の肉筆画への考察の興隆と、2016 年に生誕 290 年を記念して行われた二つの展覧会²⁾は大きく進展した近年の春章研究の成果であった。

2-2. 《婦女図》の空間

先行研究では、本来俗なる浮世絵でありつつも春章の作品に備わる雅さの解明に重点が置かれていたが、竹中氏はむしろ自明のこととされてきた俗なる特性を、浮世絵独自の「柱絵」に倣った構図と、空間表現の遠近法に注目して論じた。《婦女図》は、他の春章肉筆美人風俗画と比較しても、縦長で幅の狭い画面が用いられており、その切り詰められた空間のなかに細密な背景の書き込みが見られる。そして、向井大祐氏が想定復元模写として制作したように³⁾、《婦女図》は本来、一双の屏風に12の月の絵が並んでいたと考えられる。ここから竹中氏は、屏風絵でありながら、絵巻物のように右の扇から左の扇へと順に見ていったであろう鑑賞方法を想定する。そして、それぞれの絵の空間の奥行きは左右・上下・手前・奥へと異なっており、それらを狭い間隔で見えていく際には目まぐるしく揺れ動く視覚体験がもたらされた可能性を指摘する。

次に竹中氏は、北尾重政と春章の合作による『青楼美人合姿鏡』(1776)と《婦女図》の主題・モチーフ・空間構造が共通する作品があることを提示した。『青楼美人合姿鏡』は吉原の遊女たちの芸と教養をテーマにした錦絵本である。《婦女図》は「私」領域の裕福な家庭の女性たちが季節を楽しむ姿を、古典文化を下敷きにしつつ優雅に描いているが、この作品が「公」領域であった遊郭の空間を下敷きにしていることから、《婦女図》の空間の「公私」と「雅俗」はきわめて複雑な関係のうえに成り立っていることが確認された。

2-3. 発表の結論

結論として挙げられたのは以下の七点である。(1)《婦女図》の縦長の構図は浮世絵独自の「柱絵」の構

図を採用したこと、(2)襖の間から「隙見」(その姿をこっそりと覗くような見方を、竹中氏はこのように言う)したような室内空間は、大和絵から続く軸投影と斜投影による空間表現を左右から切り詰めた大胆な構図を持つこと、(3)一点ごとの奥行きが左右に変化し、画面中での視点も手前や奥に変化すること、(4)特に六曲一双の屏風を月次絵として右から左へと巻物のように眺めていくと、空間の変化が感じられるラディカルな構造があること、(5)武家の妻女や裕福な町人の内儀として描かれた女性の風俗は、10 図中 5 図に遊女の風俗画である『青楼美人合姿鏡』と主題、モチーフ、構図の点で類似性があること、(6)貴人たちが私的に鑑賞する什宝として「雅」だけではなく、新たな「俗」の魅力を求める貴人たちの階級を超えた趣味に込めていること、(7)俗な主題と当世風な構図で描ききっても隠しようのない優美さは、肉筆絵画ならではの輝きと透明感のある色彩と緻密な質感の描写、そして繊細な線描で表現されたたおやかな姿態と清雅な面持ちにあること、である。

以下では、これらの指摘をもとにレビューを行う。

3. レビュー

《婦女図》に描かれた女性たちは、庭先、縁側、室内、船の上と「私的」な領域を動き回りながら、季節の風雅を楽しみ、子どもたちと親密な視線を交わし合う。そこでなされる「遊び」が庶民的な娯楽をはみ出す典雅さを備えていることは、例えば《四月 杜鵑》に琵琶や笙という貴族の楽器が描かれていることから看取できるだろう。《二月 蹴鞠》の女性たちが松にかかった鞠を棒で落とそうとしている様子や、《八月 名月》の船の上で立ち上がる姿は、優美でありつつも彼女たちの生き生きとした動きや生命力を感じさせるものである。彼女たちの姿に「俗」の要素が加わったことは、女性の日常が貴人の様式張ったものではなく、生きる喜びの備わったものであることも同時に意味することになる。これらの作品からは、蹴鞠や船遊びといった活発な余暇活動に彼女たちが関わっているという物語が窺えるのである。伝統的で典雅な画題のなかで、綿密に計算され加味された彼女たちの活力は文字通り「きかせ味」として《婦女図》をより味わい深いものにしている。そして、そのようなびりつとした味わいこそ、大和絵の本職絵師には出せない妙味として勝川春章が自家薬籠のものにしたのではないだろうか。

その姿をこっそりと覗くような見方をすることで、鑑賞者の視線は美女たちの活力に満ちつつもゆったりした姿態の美しさに惹きつけられる。「隙見」であるから、鑑賞者は美女たちと同じ年中行事の空間に参入することではなく、あくまでも「見る者」という特権的な立場に居続ける。そして、12 枚の絵が一覧可能な屏風という形をとることで、鑑賞者は、この作品内に流れる一年の時間

を、一挙に満喫するという贅沢もまた手にいれるのである。その点で《婦女図》は貴人の什宝に相応しく、時間と空間の両方を我が物にしたいという持ち主の夢を暗示している。

《六月 行水》や《四月 杜鵑》では、母子の裸体や着物が乱れた寝姿がモチーフに登場する。《六月 行水》には燈明を持つ侍女が描かれていることから、画面内の時間は夕暮れ時だろうか、母子の肌は透けるように白く輝いて清潔な涼しさを感じさせるが、これは本来には見られることを想定しないような場面である。これらはもちろん、季節の画題ではあるのだが、その中の女性たちは家庭空間のなかでも極めて「私的」な時間・空間でくつろぐ、しどけない姿を晒しているのである。しかも、行水や就寝といった生活の場面から、計算した構造を用いることで生活につきまとう臭いを脱臭し虚構の中に再配置することに成功している。《四月 杜鵑》の画題は、ホトギスの初音を聴こうとする場面であり、『源氏物語』にも登場する貴族的な営為を表しているが、屏風にかけられた着物や寝具の赤色は彼女たちの寝姿の艶やかな美しさを見事に演出している。

左右・奥手前と動く視線を誘う遠近法と、後ろ姿のモチーフが効果的に配置されることででもたらされる立体感、美女たちの「私的」な一瞬を一層魅惑的なものにする。そしてその目眩く一瞬は彼女たちの美貌と同じく、極めて儂いものである。家庭内の幸せな日常は永遠に続かない。赤ん坊はすぐに大人になり、少女は大人になり、女たちは年老いていく。それゆえに《婦女図》の女性たちは永遠の中に凍結された優美さの理想としてあり続ける。

家庭内が日常的な空間＝ケであるからこそ、《婦女図》描かれるような年中行事がハレの意味を持ち、華やかなものでありえる。しかしそもそもは家庭内とは、くつろぎや愛情表現の場である。そうはいっても現実的には家庭内は、病、老い、出産などの場所でもあり、連綿と続く日常の生活の繰り返しがそうであるように、美しく、楽しみに溢れたばかりの場所ではない。特に近代以降は「公」領域と「私」領域は峻別され、家庭内は囲い込まれ、密室としての性格を持つようになる。そのような家庭内の密室性は、場合によっては暴力や虐待をも誘発するが、それらは、外部から見えにくい分「公」のそれらよりも醜悪で悪質なものでさえありうる。

それだからいっそう、表象の中の家庭空間はくつろぎや楽しさの理想をまとう「浮世」として、現実を超越した富喜と美に満ちた「私」的空間あってほしい——。このようなあらまほしさを受け止める一つとして、春章の《婦女図》豪華で雅な空間は私たちを魅了しているのではないだろうか。

[注]

- 1) 内藤正人『勝川春章と天明期の浮世絵美人画』、東京大学出版会、2012年。
- 2) 「生誕 290 年 勝川春章—北斎誕生の系譜」、太田美術館、2016年2月2日～3月27日。「生誕 290 年記念 勝川春章と肉筆美人画—〈みやび〉の女性像」、出光美術館、2016年2月20～3月27日
- 3) 向井大祐「肉筆浮世絵の研究—MOA 美術館蔵重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章筆の想定復元模写を通じて」、東京藝術大学博士論文、2016年